ケイト・ショパンの「一時間の物語」──『目覚め』との比較から浮上する「心臓病」の機能

Kate Chopin's "The Story of an Hour": The Function of "a Heart Trouble" in Light of *The Awakening*

宇　津　まり子
Mariko Utsu

Abstract

Berkove is right in saying that the traditional interpretation of Louise Mallard as a repressed wife is based on extra-textual assumptions; this paper, nevertheless, attempts at a detailed analysis of the similarities between "The Story of an Hour" and *The Awakening*. Louise and Edna's awakenings begin prompted by the loss/absence of their binary counterparts, husbands; both are vague and nameless, haunted by imageries of nature and childhood, and, as Cunningham has shown, accompanied by sexual desire. If women were considered vessels for their husbands' children in the late nineteenth-century context, the careful control of female bodies, desire and even mind was essential; marriage, as the consummation of heterosexual love, played a substantial role in this picture. Chopin's contemplation upon women's oppression thus comes in a trinity: self-assertion, ownership of their bodies and desire, and liberation from marriage.

The two works bear striking similitude, even to the final death, and this very fact attracts attention to the sole difference──how their protagonists die. To be sure, Louise's heart trouble is the preparation for the final irony. The economy of the work, however, brings into focus a possibility that Chopin, in order to avoid wordy descriptions and explanations, utilizes an extra-textual metaphor that draws a parallel between the conditions of having a heart trouble and being a woman. The story starts with a participial construction, "Knowing," but its subject cannot be "great care"; who exactly knows and takes great care is actually left untold, which connotes it is everyone, or society as a whole. Based on their supposed frailty, patients of heart disease and women alike are constantly and paternalistically taken care of, forbidden, instructed, advised──in short, ruled──by others. Escaping one relationship thus amounts to nothing, which rationalizes the fate shared by Louise and Edna.

"The Story of an Hour"はショパンの代表作の一つとして頻繁に読まれ、高評価を得てきた。Bernard Koloskiの1994年の調査によれば、1904年のショパンの死から17年間は、100以上ある彼女の作品は全て絶版になっており、アンソロジーに彼女の作品が収録され始めるのは1921年だという("Anthologized"18)。1921年から92年までの間にアンソロジーに収録のあったショパン作品をクロノロジカルにまとめた彼のリストの中で、「一時間の物語」は9番目に登場する。1975年にSusan Cahillが編集した*Women and Fiction: Short Stories by and about Women*に収められたのが最初である[1]。

ショパン本人が残した記録によれば、1894年４月19日に執筆されたこの作品は、その月のうちに*Vogue*誌、次いで*Century*誌、10月までの間に*Short Stories*誌、*Chap Book*誌、そして再び『ヴォーグ』誌へと送られ、12月にこの雑誌に発表されている（*Private Papers* 169)[2]。Per Seyerstedは４度に渡る却下の理由を、編集者が「この作品を不道徳だと看做したためだ

ろう」(68)としているが、ビクトリア道徳が支配的だった19世紀末に、夫の突然の事故死の知らせを受け、思いがけず獲得した自由に歓喜するという内容は確かに過激である。

この作品を執筆した1894年、ショパンは5年に渡って雑誌や新聞に発表してきた短編作品のうち23編をまとめ、初の短編集*Bayou Folk*として大手Houghton Mifflinから３月に出版していた。Emily Tothによれば、『バイユー・フォーク』の書評は、「主要な雑誌と新聞のほぼ全て」に掲載され（*Unveiling* 149)[3]、ショパン本人の日記には、その数は100を超えていたと記されている（1894年６月７日付；*Private Papers* 187)。興味深いのは、続けてショパンは「批評能力を見せるようなものはとても少ないことに驚いている」（同）と記述していることだ。『バイユー・フォーク』に収められた作品の多くは、トスの表現を拝借すれば、「結婚というものへの妥協のない批判」（*Unveiling* 151）である。それにも係わらず「ほとんどの批評がルイジアナからの地方色の話」（同149）として収録作品を評価していたのであれば、これ以降、ショパンが次第に主題選択や描写において大胆さを増していくことは不思議ではない。築き上げた全国的名声を５年後の*The Awakening*の出版によって台無しにしてしまうまでの道筋が目に見えるようである[4]。

『目覚め』の主人公Edna Pontellierは、妻・母としてしか自分が存在し得ないことに疑問を抱き、抵抗への途を模索して彷徨う。本論の扱う「一時間の物語」も同様に、結婚制度の中で女性の自己が認められないことに気づく主人公を描き、家父長制を痛烈に批判している。この作品のアンソロジー初収録が1975年であるのも、アメリカにおける女性解放運動の中、1972年に*Redbook*が『目覚め』を再版して（Toth, "Introduction" 9）活動家たちの間で大きな話題となったこと、それによってショパンのフェミニスト的作品への需要が高まったことと大きく関連しているだろう。

Mark Cunninghamは「一時間の物語」と『目覚め』を並置し、「目覚めというものを、一時間という極めて凝縮した形で描写することを試み、その後ショパンはアメリカ文学の一傑作の創作へと進んだ。つまり、ペースもゆっくりで、心理的にも信憑性があり、多くの段階を踏んだエドナ・ポンテリエの目覚めである」（212）と評している。とするならば、極めて短い「一時間の物語」を『目覚め』と対照しながら検討していく意義がある。本論では、『目覚め』を手掛かりとしてこの作品を読んでいくと共に、物語の前提となっているMrs. Mallard/ Louiseの「心臓病」が果たす役割について一考察を加えたい。

ショパン研究の第一人者であるセイヤーステッドは、1969年に出版した伝記と作品解釈を交えた*Kate Chopin: A Critical Biography*で、この作品を「自己主張（self-assertion）という主題の極端な例」（58）と評している。テクストにも、「彼女が突然、自分の存在の最強の衝動として認識したこの自己主張を持つということを前にして、未解決の謎である愛など一体何だというのだ」（353）とあり、この作品の主題が女性の自己主張であることに異論を挟む余地はない。解釈の余地はむしろ、ルイーズという人物の評価にあるようだ。

Daniel P. Deneauは、アンソロジーに収録されることの効果として、興味深い指摘をしている――「少なくともアンソロジーの読者の間では、一つの問題について議論が続いている。つまり、ルイーズはノーマルで理解可能な、思い遣りのある女性なのか、あるいは、自己中心的で我が儘な怪物もしくは逸脱者なのかということである」（210)。この疑問については、Lawrence I. Berkoveが詳述している。トスが、「ルイーズの死は、女性の思考に対する父権社会の盲目さに向けられた深い皮肉を表明しつつも、他者のために常に自らを犠牲にしてきた家族という世界の中で起こる」（"Kate Chopin Thinks Back" 24）と指摘していることを受け、バーコヴは「この物語は社会や結婚についてではなく、ルイーズ・マラードについて」（153）

であると反論する。テクスト中には、彼女の結婚についての具体的な問題の描写がないことを指摘し、唯一それを仄めかしている箇所として「彼女は若く、色白で落ち着いた顔をしており、その皺は抑圧とある種の強さすら示していた」(353) という記述を挙げ、

> しかしながら、この「抑圧」の原因は全くもって明らかではない。例えば社会や彼女の結婚といった外的問題なのか、あるいは感情や気まぐれをコントロールするには強さが必要だということを意識しているという内的問題なのか。作品にはほとんどヒントがなく、後者の方なのではないかと思われる (154)

と指摘する。またテクストにある、

> 男女を問わず、同じ人間に対して自分の意志を押しつける権利があると信じ込んでいる、あの盲目的な執拗さをもって彼女の意志を曲げようとする強力な意志はもうなくなる。その意図が親切なものであろうと残酷なものであろうと、犯罪行為であることに変わりはない (353)

というルイーズの内面を描く件については、「これは歪んだ愛情観である。愛というものは概して、相手を喜ばせ、相手に与えることに喜びを見いだすものだ。愛を『犯罪』と看做すなど普通の態度とは思われないし、感情的に健全だとは言えない」(155)とし、ゆえにルイーズは「ヒロインではなく、未熟な自己中心主義者、自らの極端な自己主張の犠牲者」(152) だと彼は判断している。

この作品には「父権社会の盲目性、抑圧、ルイーズの継続したあるいは無私の犠牲」といった証拠はなく、トスに代表される一般的見解は、「テクスト外の憶測」から生じるものでしかない (153) というバーコヴの指摘は的を射ている。しかし、「テクスト外の憶測」として排除してしまうには大きすぎる共通点が「一時間の物語」と『目覚め』の間には存在しており、以下それを検討したい。

「彼女を見る時には常に愛がこもっていた」(353) と夫Brentlyの顔は描写されるが、『目覚め』のエドナもまた、「世界で最も良い夫だと皆が宣言」(887) するような、そして「暗黙の了解となり、自明のこととなった優しさと不変の献身」(886) を見せるような夫を持っている。エドナは経済的にも安定し、二人の息子にも恵まれ、不満はないはずの結婚をしているにも係わらず、「どこかよく分からない意識の中で生まれてくる、言い表せない圧迫感」に襲われ、「なぜ泣いているのか分からない」(886) ままに泣くのである。「一時間の物語」においては具体的な記述なはいが、夫の死がもたらすであろう経済的苦境や子どもの将来への不安などへの言及はないことを考えると ―― そして、上記のように夫の愛情を感じていたのであれば ――ルイーズの結婚もエドナの結婚と同様に幸せなもの、何の特殊性もない普通の結婚として提起されていると考えるのが妥当である。Winfried Fluckは、この作品が検討しようとする課題を「『愛』――ここでは夫に対する穏やかな感情的関係 ――あるいは自己主張のどちらが女性の人生の中で最も強い衝動なのかという問題」(154)と捉えているが、エドナの感じている漠然とした圧迫感と並置して考えるなら、「愛」あるいは「自己主張」という対立ではなく、結婚をその具現とする男女間の「愛」そのものの中に、女の従位性を決定づける力が働いているという指摘こそが、「一時間の物語」でショパンの描こうとする主題になっているのである。

ルイーズとエドナの目覚めの共通点は、その開始点という面でも類似した構造を取ってい

る。エドナの突然の変化は、グラン・アイルという、妻と子どもたちだけの避暑地、つまり女のコミュニティで、本人が混乱するほど突然に現れる。夫が眼前に存在し、夫に対する妻という対立項で進行する日常から離れ、自らの定義対象を一時的であれ失うという非連続性の到来が、彼女の目覚めを促したと考えるなら、ルイーズに知らされた夫急死の情報は、正にそれに当たる。

覚醒の契機を得たその後の状態もまた、両作品に共通する比喩で語られる。姉妹Josephineの腕の中でひとしきり泣き、部屋に戻って椅子に身を沈め、時折嗚咽するルイーズは、「泣きつかれて眠り、夢の中でもむせび泣き続ける子どものよう」(353) だと描写される。そしてエドナもまた、理由の分からない憂鬱を感じるようになってから思い出すのは、「ケンタッキーの夏のある日、そこを歩いている小さな女の子には海の様に大きく見えた草原」(896) であり、「時々、この夏は緑の草原をまた歩いているような感じがする。ぼんやりと目的もなく、何も考えず、導かれもせず」(897) と、友人Adèle Ratignolleに語っている。Mary E. Papkeは「一時間の物語」を、「実に日常的な現実を詳細に記述し、日常世界の境界線が突然に打ち砕かれる、女性の人生のあの瞬間を細心の注意をもって分析する」(74) と評価している。「子どものよう」になったルイーズの目は、「知的思考の中断を示して」(353) いるとされ、夫に対する妻という構図で動き続ける日常を把握する「知的思考」が打ち砕かれた状態は、妻・母という役割に入る以前の「子ども」という比喩で表されていると考えられる。「名前のない問題」と題された章で始まる*The Feminine Mystique*の時代の女性たちが、半世紀に渡って忘れ去られていた『目覚め』や「一時間の物語」を発掘し、その主題が彼女らの問題意識に見事に合致していたことに驚嘆したのも、19世紀のショパンが「幸せな結婚」という生活のどこかからふと噴出してくる漠然とした憂鬱という「名前のない問題」に既に言及していたからであろう。

ルイーズとエドナは、このように同様の契機を得て日常から覚醒するが、類似点はそれだけにとどまらない。極めて短い『目覚め』第6章は、エドナが経験している不可解な衝動や気分の起伏を説明している。語り手は、「彼女の中に、ある光がぼんやりと差し始めていた――誘導しながらも、それを禁じる光が」と説明し、「つまるところ、ポンテリエ夫人は一人の人間として、自分が宇宙のどこに置かれているのかを理解し始め、個人として、自分の内外の世界とどういった関係にあるのかを把握し始めていた」(893) と言葉を足している。誘導と禁止といった相矛盾する衝動はルイーズにも共通しており、空の方から何かが自分に向かって来ると感じた彼女も、一度は「それを意志の力でくい止めようと」(353) している。

目覚めをもたらす媒体もまた、両作品に共通する。上に引用したエドナの目覚めの説明には、避暑地で日々目にし、触れ、その音を聞いている海の描写が続き、これが彼女の深奥に語りかけ、これまで感じようとしなかったもの――感じることを禁じてきたもの――を呼び起こす役割を果たしていることが示唆される。

> 海の声は誘惑的である。決して途絶えることなく、ささやき、叫び、つぶやき、魂を誘い出し、ひととき孤独の深淵を彷徨わせ、瞑想の迷路に惑わせる。
>
> 海の声は魂に語りかける。海の感触は官能的で、その柔らかく緊密な抱擁の中に身体を包み込む。(893)

「一時間の物語」においても、自然は目覚めを媒介する役割を負っている。自室に戻ったルイーズが目にするのは、窓の外に広がる世界である。

> 家の前の広場に植えられた、新しい春の生命にざわめく木々の先端が見えた。雨の香しい吐息が漂っていた。道では行商が声を上げていた。誰かが歌っている遠くの歌声がかすかに彼女に届き、そして無数のスズメがひさしの下でさえずっていた。(352)

そして先ほど引用した「思考の中断」が訪れ、その後、

> 何かが彼女に向かって来ており、彼女は恐る恐るそれを待っていた。一体何なのか。彼女には分からなかった。名指しするには、あまりにかすかで捉え所がなさすぎた。しかし彼女は、それが空から這い出し、空気を満たしている音、匂い、色を貫いて、自分の方にやって来るのを感じていた（353）

と目覚めのプロセスが開始される。

S. Selina Jamilは、「ショパンは、知覚するという行為における理性の優位性という伝統を排し、代わりに感情に優位性を置いて」（215）おり、目覚める以前は「マラード夫人の感情は空虚な社会慣習の型にはまるよう、もみ消され、抑圧されていた」（216）と論じている。またデノーは、ここでルイーズに向かって来る「何か」について、「俗世の経験領域、あるいは論理規則を超える何か」（211）だと推測している[5]。ジャミルの言う「理性」、デノーの言う「論理規則」は、日常生活を支配するメンタリティーを表し、前述の「子ども」というメタファーと同様に、ショパンは文明と対置される自然に、日常から排除・抑圧される感情や思考を回復させる契機を見ている。

デノーはまた、ルイーズの目覚めの描写に性的な要素を見る批評家の一人でもある[6]。近づいて来る「何か」を理解し始めた彼女は、「胸は激しく上下していた。自分を捕えようと近づいてきている物を彼女は認識し始めた」（353）と描かれる。デノーは、「捕える（possess)」という表現には、肉体関係を持つという意味があること、そして "The Storm" に描かれるAlcéeとCalixtaの情事に正にこの単語が使われていることを指摘している（デノー 212; "The Storm" 595)。「何か」を撃退することができず、身を任せたルイーズの「脈は速く、流れる血が彼女の体を隅々まで暖め、脱力させた」（353）とされていることも併せ、彼女の目覚めが性的な快楽に近接していることは否めない。デノーは、「純粋に性的な激情そのものが人の目を開かせる」（212）とショパは考えているとし、その根拠としてAlcée Arobinと性交渉をもったエドナが、「何よりも、理解することができた。彼女は自分の目から霧が晴れ、生の意義――美と獣性とで作られたあの怪物――を直視し理解できるようになったと感じた」（967）というテクストの表現を引いている。

しかし、デノーは「何を理解したのか」という部分の引用を途中で切ってしまっている。彼の引用した部分には「しかし、彼女を襲った様々な相反する感覚の中には、恥や自責の念はなかった。鈍い後悔の念はあった。なぜなら、彼女を燃え上がらせたのは愛のキスではなかったから。彼女の唇に命の杯を添えているのは、愛ではなかったから」（967）という文が続く。ここで注目したいのは、性行為がエドナ本人の「命」に寄与しているという点である。女性の性交渉を再生産という、他者の命を産み出す目的に限定する19世紀末という時代にあって、性交渉と再生産を切り離したのみならず、前提として性欲を持たないとされた女性にそれを認め、しかも欲望を本人の生に寄与するものとして位置づけている所に、この引用の最もラディカルな点がある。

これを結婚制度との関係で考えるなら、物語終盤、Robertとの再会におけるエドナの言葉にそれが表われている。

> ポンテリエ氏が私を解放するなんて、不可能な夢に時間を費やして、あなたは本当に、本当にバカな子ね。私はもうポンテリエ氏が手放すかどうかを決める所有物の一つではない。私は自分の選ぶ所に自分を与える。もし彼が「ほら、ロベール、彼女を受け取って幸せになれ。彼女は君のものだ」なんて言ったとしたら、あなたたち二人を笑うわ」(992、強調現著者)

強調部分は不自然な日本語になっているが、原文では"I give myself where I choose"である。文脈から判断すれば、ポンテリエ氏あるいは自分に妻として所属する以外には彼女の行く場所はないと考えているロベールに対し、他の選択肢も含め「自分の行き場所は自分で決める」という宣言になるだろう。しかし、女性が「自分自身を与える」という表現にもまた性的含意がある。父から夫へと譲り渡され、夫の正統な子を産む役割を課された女の身体は、その再生産の潜在性ゆえに欲望と共に厳重に管理され、そして結婚制度はこれを担保する。女性の置かれた状況を考察するにあたり、ショパンは自己意識、身体／欲望、結婚制度を不可分の三位一体として捉えていることが、エドナのたどる道筋から見えてくる。こうした『目覚め』との関連から考えれば、「一時間の物語」のルイーズの目覚めに欲望の解放を思わせる描写が存在することも頷ける。

そしてエドナとルイーズは、目覚めの終着点が「死」であるという点でも共通する。ただ一つ異なるのは、エドナが自殺するのに対し、ルイーズの死因は「心臓病」であるという点であり、唯一の相違点であるがゆえに検証を待っているように思われる。「一時間の物語」は、「マラード夫人の心臓には問題があることが分かっていたので、夫死亡の知らせはできる限り優しく伝えるように細心の注意が払われた」(352) という一文で始まる。死亡したはずの夫は、実は事故があったことすら知らずに無事帰宅し、そのショックで死亡したルイーズを「医者が来て、彼女は心臓病で死んだと言った――死ぬほどの喜びで」(354) と診断するという最後の一文の皮肉を成立させるのが、この設定の第一の役割である。これ以外にも、これまで何人かの批評家が彼女の心臓病の意味の可能性について思索を巡らせている。例えばAllen F. Steinは、身体的弱さという明らかな意味の他、自己主張が自分にとっていかに重要であるかを認識してもそれを貫くことができない、「決意の弱さを象徴的に表しているのかも知れない」(65) としている。Barbara C. Ewellは、夫ブレントリーの高圧さがルイーズの心臓病の源になっていると考え、ゆえに「ブレントリーの死と共に消え……再来と共に戻ってくる」(89) のだとしている。またHiroko Arimaは、心臓病によってもたらされるルイーズの虚弱なイメージは、「圧倒的な自由の感覚に抗することができない」(54) 理由づけ、つまり自由を受け入れざるをえない理由づけとして使われているという面白い指摘をしている。

この論文では、心臓病が、物語の前提となる状況を付加的に説明する機能を果たしていることを示したい。これまで見てきたように、『目覚め』と同様の複雑な主題を扱いつつも、この作品は1,000ワードというコンパクトな形式に収められている。とするなら、ショパンは、テクスト外に既に存在している象徴的意味合いを持つ事柄を取り入れることで、冗長な説明や描写を省略することを目指しているとも考えられる。例えば、同年翌月に執筆された"Lilacs"では、「女優」や「舞台」という言葉は用いないが、「マドモアゼルがあんなにも有名にした役をラ・プティ・ギルベルタが演じるなんて観衆が許さない」、あるいは「マネージャーと自称するあの男」(361) といった台詞を召使いに言わせることによって、ショパンは主人公Adrienneをショー・ビジネスで活躍する人物として設定し、「女優」というものの持つ性的放埒さや堕落といったイメージをテクスト内の確実な事実として打ち立てること

となく稼働させている。(Utsu 304-05)。「一時間の物語」におけるルイーズの心臓病もまた、こういった役割を果たしているのではないだろうか。

先述のように、この作品の第一文はマラード夫人の心臓病を明らかにするものである。原文では、"Knowing that Mrs. Mallard was afflicted with a heart trouble, great care was taken to break to her as gently as possible the news of her husband's death"(352) と表現されており、少々ぎこちない英語になっている。分詞構文を使用しているが、"Knowing"の主語は"great care"ではありえず、また主節は受動態を取っているため、結局の所、「知っている」のが誰なのか、そして「注意を払う」のが誰なのか共に明らかにされない。文脈上はもちろん、それは夫の友人で彼の死亡の情報を最初に得たRichardsであり、姉妹であるジョセフィーヌであるのだが、なぜ彼女の身体を気遣う人たちがこのような形でぼかされているのだろうか。

併せて考えたいのは、冒頭でバーコヴの指摘を検討する際に挙げた、

> 男女を問わず、同じ人間に対して自分の意志を押しつける権利があると信じ込んでいる、あの盲目的な執拗さをもって彼女の意志を曲げようとする強力な意志はもうなくなる。その意図が親切なものであろうと残酷なものであろうと、犯罪行為であることに変わりはない（353、強調現著者）

という件である。スタインはここを根拠とし、ルイーズは夫の死によってこのような状況が付随してくる関係を逃れたのだとしている（60)。この箇所と、先にも引用した「彼女は若く、色白で落ち着いた顔をしており、その皺は抑圧とある種の強さすら示していた」(353) というルイーズの顔の描写以外には彼女の生活に何ら問題があることを示す部分は存在せず、ブレントリーとルイーズの結婚に抑圧／被抑圧関係を指摘するスタインを始めとした多くの批評家は、これらを根拠として論を展開していると思われる。しかし、心臓病の存在を明らかにする最初の一文、および「男女を問わず」との断りで始まる記述から考えられるのは、ルイーズの「意志を曲げようとする」人物はブレントリーに限定されないということではないだろうか。つまり、彼女の心臓病を理由として気を遣い、彼女の身体への影響の憶測に基づいて、あらゆる人が彼女の言動を支配してきた――命に関わる可能性を含むがゆえに、こうした他者は「盲目的な執拗さ」を持ちえ、「強力な意志」として知覚されてきたということではないだろうか。健康体であるエドナを主人公に置く『目覚め』と比較することによって浮上するのは、女であるということそれ自体が、致命的な病気であるかのように――庇護という名の下に――支配を受ける運命であることを、心臓病というテクスト外の比喩を持ち込むことでショパンは語っているという可能性である。

カニンガムは、リチャーズが身を挺して遮ろうとしたのは、夫の帰宅を見るルイーズの視界ではなく、妻が倒れる姿を見るブレントリーの視界である可能性を指摘し（50)、彼女は夫を見ていないとすることで、死因となったショックを解放された喜びに限定している。そして、このように限定することでショパンの社会批判は強まり、

> 「一時間の物語」は、『目覚め』で完成されることになるテーマを練り上げ、試していく過程に過ぎない一作品ではなくなる。そうではなく、19世紀終わりのアメリカ社会における女性の位置は、生を否定する父権社会の制限から逃れようとすること自体が自滅を意味するほど厳しいものだったことを、この作品は描いているのだ（49)

と結論づけている。スタインは、ルイーズの逃れた「関係」を"a relationship"と表現し、ブ

レントリーとの婚姻関係だけを問題にしているが、カニンガムの結論から導き出されるのは、「女」が社会全体の構築である限り、夫との関係から逃れた所で、それは無意味だということである。そしてだからこそ、ルイーズもエドナも共通の死という結末を迎えるのではないだろうか。

「一時間の物語」は、夫死亡の知らせを受けて自分が抑圧されていたことに気づき、自由に目覚める妻の物語であるという解釈が既に定着し、実際の所、議論され尽くされた感のある作品である。バーコヴの指摘するように、伝統的解釈はテクスト外からの憶測――特に『目覚め』においてショパンの主張は完成されるという憶測――に基づくものであり、「女」という問題を構造的に捉えようとしないならば、特殊で逸脱した個人の物語として解釈することもできる。

しかし、両作品を並べ、ルイーズとエドナの目覚めの過程を詳細に照合していくと、改めてその類似性の強さが確認される。目覚めの契機となっているのは、夫の不在という非日常性の到来であり、また目覚めの描写ではその漠然性、「名前のなさ」が強調されている。目覚めの過程を進む二人は共に、子どもという比喩で語られ、海や木、空といった自然物と性的欲望とが目覚めに寄り添っている。

類似性の確認は、唯一の相違点である死因、つまりルイーズの心臓病を必然的に際立たせ、そこに注目を促す。「一時間の物語」は『目覚め』と同様の主題を描こうとしていると考えるなら、限られたスペースでは描き切れない「女である」という状況が「心臓病」という比喩に込められており、特定の夫との結婚という一つの関係を逃れるだけでは事態は変わらない――死ななければならない――という社会的状況を描き出す一助となっている可能性が浮かび上がってくる。

注

[1]コロスキーは*Short Story Index*に収められたアンソロジーを調査対象としている。時期の早さでは、"At the Cadian Ball"(初収録1921年)、"Azélie"(同1923年)、"Polydore"(同1925年) と並ぶ。版や刷の更新は数えず、アンソロジーのタイトル別に収録数を見ると、1929年の*Representative Modern Short Stories* (Macmillan) から収録され始めた"Désirée's Baby"が7件と圧倒的に多い。本論の扱う「一時間の物語」は、アンソロジー収録では2件に留まるが、1994年時点で入手可能だったショパン作品のみを集めたコレクションでは、8タイトル中5タイトルに収録されている。

[2]『ヴォーグ』掲載時のタイトルは"The Dream of an Hour"である(*Complete* 1017)。Barbara C. Ewellは、これは「編集者によりつけられた」(88) タイトルだとしている。

[3]日本語表記は現著者の翻訳による。

[4]トスは「地方色」という括りが編者や読者、批評家の目を逸らさせる働きをしたことの他、『ヴォーグ』誌が他の雑誌では採用しないような作品を多く載せたことがショパンに判断を誤らた可能性もあるとしている (*Unveiling* 172-73) 。

[5]デノーは、この場面をある種の啓示として捉えることができるとし、2つの解釈の可能性を挙げている。1つはギリシア神話のレダと白鳥姿のゼウスに言及している可能性、もう1つはキリスト教の聖霊の降臨になぞらえている可能性である。

[6]イーウェルも、ルイーズが「名前のないもの」に身を任せた際の感覚を「身体的、性的ですらある解放」(90)としており、またBert Benderも、ルイーズの感じているものを「解放による恍惚」(119)として、共に性的興奮に言及している。

引用文献

Arima, Hiroko. *Beyond and Alone!: The Theme of Isolation in Selected Short Fiction of Kate Chopin, Katherine Anne Porter, and Eudora Welty.* Lanham, Md.: UP of America, 2006.

Bender, Bert. "Kate Chopin's Quarrel with Darwin Before *The Awakening*." Petry 99-128.

Berkove, Lawrence I."Fatal Self-Assertion in Kate Chopin's 'The Story of an Hour.'"*American Literary Realism* 32.2 (2000): 152-58.

Boren, Lynda S. and Sara deSaussure Davis, ed. *Kate Chopin Reconsidered: Beyond the Bayou.* Baton Rouge: Louisiana State UP, 1992.

Chopin, Kate. *The Awakening. Complete* 881-1000.

—. *The Complete Works of Kate Chopin.* Ed. Per Seyersted. 1969. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1993.

—. *Kate Chopin's Private Papers.* Ed. Emily Toth and Per Seyersted. Bloomington: Indiana UP, 1998.

—. "Lilacs."*Complete* 355-65.

—. "The Story of an Hour." *Complete* 352-54.

—. "The Storm." *Complete* 592-96.

Cunningham, Mark. "The Autonomous Female Self and the Death of Louise Mallard in Kate Chopin's 'Story of an Hour.'" *English Language Notes* 42 (2004): 48-55.

Deneau, Daniel P. "Chopin's 'The Story of an Hour.'" *The Explicator* 61 (2003): 210-13.

Ewell, Barbara C. *Kate Chopin.* New York: Ungar, 1986.

Fluck, Winfried. "Tentative Transgressions: Kate Chopin's Fiction as a Mode of Symbolic Action." *Studies in American Fiction* 10 (1982): 151-71.

Freedan, Betty. *The Feminine Mystique.* 1963. New York: Norton, 1997.

Jamil, S. Selina. "Emotions in 'The Story of an Hour.'" *The Explicator* 67 (2009): 215-20.

Koloski, Bernard "The Anthologized Chopin: Kate Chopin's Short Stories in Yesterday's and Today's Anthologies." *Louisiana Literature* 11 (1994): 18-30.

—, ed. *Approaches to Teaching Chopin's* The Awakening. New York: MLA of America, 1988.

Papke, Mary E. "Chopin's Stories of Awakening." Koloski, *Approaches* 73-79.

Petry, Alice Hall, ed. *Critical Essays on Kate Chopin.* New York: G. K. Hall, 1996.

Seyersted, Per. *Kate Chopin: A Critical Biography.* 1969. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1980.

Stein, Allen F. *Women and Autonomy in Kate Chopin's Short Fiction.* New York: Peter Lang, 2005.

Toth, Emily. "Introduction: A New Generation Reads Kate Chopin." *Louisiana Literature* 11 (1994): 8-17.

—. *Unveiling Kate Chopin.* Jackson: UP of Mississippi, 1999.

—. "Kate Chopin Thinks Back Through Her Mothers: Three Stories by Kate Chopin." Boren 15-25.

Utsu, Mariko. "Lesbian and Heterosexual Duality in Kate Chopin's 'Lilacs.'" *Mississippi Quarterly* 63 (2010): 299-312.